

エックハルト解釈上の一問題

—「誕生」と「突破」との内面的連関について—

坂 本 弘

まえがき

マイスター・エックハルト（一二六〇—一三二九）の神秘思想は、その広範囲にわたる思想的諸源の摂取と、それにもましてその尖鋭にして独創的な思弁の展開とによってひろく知られているのであるが、その中にわれわれは二つの特色的な思念が交錯しながら反復して立ち現われてくるのを見ることが出来る。その一つは魂の内奥へ神がその息子を生むという「誕生」の思念であり、いま一つは魂が神をその根柢である神性へ突き抜けて行くという「突破」の思念である。前者は主として神の側からのはたらきとして説かれ、後者は魂の側からのはたらきとして語られる。前者にあっては魂の絶対的受動性が強調され、後者において

は逆に魂の力強い能動性が押し出されている。これは、一つの事態を、両者別々のモチーフ、別々の方法によって説き明かそうとしているのか、どうか。もしそうであるならば、その事態とはいかなるものであるのか。拙稿はこの点について一つの見通しを立てようとするものである。

一 魂における息子の誕生

神が自身とひとしいものとして息子を生む—この思念は云うまでもなくキリスト教に伝統的な三一の神の教えから来ている。しかし、エックハルトの語る息子の誕生はベツレヘムの厩におけるイエスの歴史的誕生を指しているのではない。その「生み」の行われる場は人間の魂の内奥であ

る。そしてその誕生は唯一回かぎりのできごとではない。永遠性の中における間断なき誕生である。エックハルトにおいては、歴史的イエスの誕生は魂における息子の誕生の単なる象徴として背景に退く。では、いうところの息子の誕生とはどのような事態を意味するのか。

まず見なければならぬのは、その誕生の場としての魂の根柢 *grund der sèle* の説である。エックハルトにおいては魂の諸力 *potentiae animae, krefte der sèle* と魂の本質或は魂自体 *essetia animae, wesen der sèle, du sèle in ir selben* が区別される。魂の諸力の主要なものは記憶 *gedächtnisse* 理性 *vernunft* 意志 *wille* 等である。これらの諸力をもって魂ははたらく。すなわち、それらによって魂は外なる諸対象の像 *bilde* を形造り、その像を媒介として諸対象をとらえ認識するのである。魂はこれら諸力のはたらきにおいて多様化し外向的になる。しかし魂はそれらの諸力のさらに内奥にその根柢 *grund* をもつ。これが魂の本質、魂自体であり、魂の根源である。そこには如何なるはたらきもなく、ただ静寂あるのみである。それは像をもたず、如何なる媒介をもたない。これこそ魂における造られざるもの、神の本質を、そのみを受容し得るもの、そのような可能的受容性 *ein möglich empfänglichkeit* だ

ある。^①

神の生み、息子の誕生、はまさしくこの魂の根柢において起る。この「生み」への言及がエックハルトの著作の随所に多少の出入りを示しながらも反復して現われることは最初に触れたとおりであるが、ここでは典型的と思われる一例を挙げるにとどめる。

父はその息子を永遠性の中に父自身にひとしく生む。「ことばは神とともにあり、ことばは神であった。」すなわち両者は同一本性の同一者なのである。私はさらに云おう。父は息子を私の魂の中に生んだのである。わが魂とともにあるのみならず、彼はわが魂に等しく、わが魂の中にあり、その息子を永遠性の中に生むのと同じ仕方であらう。魂の中に生むのであり、まさにそれ以外ではないのだ。好むと好まざるとにかかわらず彼はそうせざるを得ないのである。(Er muoz ez tuon, ez si im Hep oder Iait.) 父はその息子を間断なく生む。そして、さらにいうならば、彼は私を彼の息子として、まさにあの同じ息子として生むのである。私はさらに云おう。彼は私をただにその息子として生むというだけではなく、それ以上なのだ。彼は私を彼自身として生み、彼自身を私として生み、私をその本質 *wesen* として、またその本性 *nature* として生むのである。彼の最内奥の源泉において、私は聖霊から湧き出る。そこでは一つの生、一つの本質、一つの作があるのみである。^②

「」にもはっきり示されているように、神の「生み」の

現実的事態は私が「生まれ出る」或は「湧き出る」という自覚的事実である。それが神の「生み」という意味をになう。神が私を神自身として、神自身を私として、部分的にはなく、神の一者性をあまりなくそのままに生むことであるときられるのである。そこでは神の本質と生と作 *werke* とは一つである。一步進めていえば、神の本質はその作すなわち「生む」というそのはたらきにおいてとらえられている。かかるものとして魂における息子の誕生は、歴とした自覚的事実でありながら、「永遠性において」と云われるように、時間をこえた意味をもつのである。

エックハルトはこの「生み」を「彼(神)はそうせざるを得ないのだ」という。その意味は次のように考えられる。すなわち、この誕生は恩寵のはたらきとしてとらえることはできない。恩寵といえは人格的關係において発動する神のはたらきの一つに過ぎない。神の「生み」は、恩寵がそこから出てくる神の本質そのものの止みがたい必然的発動なのである。このことは、はたらきを本質とし本性とする神にとってなら不思議ではない。神ははたらく。やみがたくはたらき出るのである。

しかし、神的本性に発するこの誕生の必然性は、勿論、人間の側における懶惰な待機を意味するものではない。誕

生を来らしめるためには、魂は無にならなければならぬ。被造物本来の無とならなければならぬ。しかし、無になるとは実践的に何を意味するのか。

エックハルトが、或は受苦 *liden* の教えによって、或は離脱 *abgeschiedenheit* の教えによって、しばしばこれを説いていることはよく知られている通りである。が、ここでは不知 *unwissen* に関する教えによってその所説を窺うことにしよう。

無となるためには、魂の諸力を外的諸対象から転じて魂自体へ、魂の根柢へ向わしめなければならぬ。外的諸対象に牽きつけられているかぎり魂自体の力は弱い。魂のその根柢への回帰、沈潜は、知の面から見ならば、不知を目指し不知に達することである。この不知は知の欠除を意味するものではなく、却って知によって *von wizzenne* 達せられる。不知は造りかえられた知 *ein überformet wizzen* である。^⑥

このいかなる所知をも絶した不知は一箇の闇黒 *dunster-rüsse* となって現われる。人はこの闇黒裡に立つて不安を感じ恐れを生ずるかも知れない。或は引返すこと *widerker* を思うかも知れない。しかし、この闇黒こそ可能的受容性 *ein mügelich empfenglichkeit* すなわち神の「生み」を内

にはらむ可能性である。人はこの闇黒への沈潜をつらぬきとおすより外はない。引返すなどということはありえないのだ。それを敢えてするならば、罪に陥り、退転して道を踏み外し、墮獄にいたるのは必定である。^⑥

さらにエックハルトは誕生現前のまぎれもない徴として次のように語る。少し長いが全文を引用しよう。

この誕生が現に起こるとき、いかなる被造物ももはやあなたを妨げることはできない。のみならず、そのすべてはあなたに対して神を指しこの誕生を指すのである。それには雷の喩えがぴったりする。雷が発してものを打つとき、樹木であろうが、獣であろうが、人間であろうが、雷は一撃をもってそれを自分に向かせる。

人がそれに背を向けていても、一撃をもってそれを自分に捻じ向ける。一本の樹に幾千の葉があれば、そのすべては一時にその葉面をその落雷の方へひるがえす。かの「誕生」に出会うすべての人にも同じことが起こるのだ。彼等は、地上的であろうとなかろうとそこに有り合わせるすべてのもの諸共、この誕生へ直ちに捻じ向けられる。実際、かつては妨げであったものが今では助長的にはたらく。あなたの顔はこのようにこの誕生に向けられる。何を見何を聞こうと、あなたはそのすべてにおいて、唯この誕生のみを受取るのである。そうだ。すべてのものがあなたにとって純粋な神になる。何故ならば唯神以外の何物をも見ることはないからだ。それは、丁度、太陽を長い間見つめた後で見る物には、皆太陽の像が現われるようなものである。もしこのあらゆるものに

神を求め神を見ることがないなら、この誕生も亦生じないのである。^⑦

以上によっても、エックハルトにおける不知の闇黒への沈潜が、どこまでも無になる意味をにないながらも、同時に神の「生み」への動性を内に深くはらんでいることが知られるであろう。そしてこの「生み」が自覚的なものでなければならぬことは、すでに注意したとおりである。この動性は沈潜の深まりとともにいよいよたかまって、遂に事々物々がすべて「誕生」を指す時節に達するのである。

註

① Franz Pfeiffer, *Deutsche Mystiker des 14.*

Jahrhunderts. Band II: *Meister Eckhart*, 1857.

(以下 Pt. へ略記) S. 26

② *Meister Eckhart. Die deutsche Werke*. Hrsg.

von Josef Quint im Auftrage der Deutschen

Forschungsgemeinschaft. 1936 ff. (以下 DW へ略記)

Band I, S. 109

③ DWV S. 1 ff. TRAKTAT 1. Daz buoch der

goetlichen troestunge. 参照。

④ Ibid. S. 377 ff. TRAKTAT 3. Von abgeschieden-

heit. 参照。

⑤ Pf. S. 15

⑧ Ibid. S. S. 25-6
 ⑦ Ibid. S. S. 28-9

二、神における存在と認識

次に、誕生の自覚的性格とのつながりにおいて、エックハルトにおける神の存在についての考え方を検討してみよう。

彼においても、スコラの伝統にしたがって、存在性は神のもっとも重要な述語となっている。神は存在である。神は存在以外の何物をも知らず、愛せず、考えない^⑧。しかし、エックハルトはこの「存在」によって何を意味したのか。

一三〇二—三年に書かれた *Questions Parisiens* には、すでに次のような注目すべき見解が述べられている。

第三に、神は存在するが故に認識するという考えを私はや私はもたないことをはつきり示そう。神は認識するが故に存在するのである。神は知性 *intellectus* であり認識 *intelligere* である。認識そのものが彼の存在の基底 *fundamentum* をなしているという在り方においてそうなのだ。というのはヨハネ伝第一章第一節には、「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。神はことばであった。」と録されているからである。だが、かの福音書作者は「初めに存在があり、神が存在であった。」とは云っていない^⑨。

ここには、神の存在を存在たらしめているものは神の知性或は認識であるという考え方が明確に打ち出されている。そしてそれは後のドイツ語説教の或るものでは次のように示される。

われわれが神を存在においてとらえるとき、それは神をその前庭においてとらえたのだ。というのは存在は神の前庭に過ぎないのだから。では、神が聖なるものとして輝やくその殿堂とはどこなのか。理性 *vernunfticheit*こそその聖堂なのだ。その聖堂すなわち理性においてより以上により本然のあり方で神が存在するところはどこにもない。それはいま一人の師の云うとおりである。「神は一箇の理性 *vernunfticheit* である。それはその独りなる認識 *bekannisse* の中に生き、それ自体の中に止まる。何物にも障えられない。というのは、そこでは神はただ独り自身の静寂の中にあるからだ。」神は、その認識の中において、自己自身を自己自身において認識するのである^⑩。

この考え方を念頭に置いて見るとき、エックハルトが神の優越せる存在性を強調する場合も、その存在は依然として認識的性格において考えられていることが知られる。神の存在性の論述として重視されている彼の出埃及記註釈もやはりこれをはつきり示している。

第三に次のことに注意すべきである。すなわち、*sum qui sum* における「われ在り」の反復は、神からあらゆる否定を排除する

純粹の肯定を示すものである。それは亦神の存在が或る仕方であり、自己自身に向つて、自己自身の上に屈折的に回帰し、その中にやどり、その中にどこまでも止まることを示す。のみならずまた一つの沸騰 *bullitio*、或は一つの自己分娩 *parturitio sui* を示している——(神の存在は)自己自身の中に沸き立ち、自己自身の中にまた上に液化・沸騰し、光りは光りにおいてまた光りへ向つてあまりなく自身を透過して射出で、またあまりなく自身に回帰・屈折するのである。そのありさまは賢者の次のことばのようである。「モナドはモナドを生む——或は生んだ。そしてそれ自身にその愛——或はその情熱——を回らし向けた。」だからしてヨハネ伝第一章には「かれにいのちあり」と云われているのだ。いちとは一種の噴出 *essentia* を、すなわち何かが内にたかまり、全く氾濫し、そのどの部分も余の部分に相入し、ついに乗り越え溢れ出るそのような噴出を意味している^④。

それが充実せる存在 *plenum esse* であるならば、それは亦生 *vivere* であり、知 *sapere* であり、これは他のどの完全性にもあてはまるのである^⑤。

ここでも神の存在がまた認識であることは確認されている。のみならず、それがそれ自体から発してそれ自体に還る円環的、回帰的なはたらきであること、かかるものとして「沸騰」であり「溢出」であり「生み」であることが説かれているのである。

このようにして、エックハルトにおける神は根源的に、何物にも優先して自覚的存在であり、その自覚は魂の自覚と相照応し、さらに本来一つであるという基本的な見通しを立てることができるであろう。このような考え方が、発想的に、スコラ学とくにドミニコ会の伝統的な認識を重視する思考方法に負うているばかりではなく、より強く新プラトーン思想の影響を受けていることは否定できない^⑥。しかし、同時に、その根柢には絶えずみずからをより深く、より根源的に開示しようとするエックハルト自身の活きた自覚体験がはたらいっていることを忘れてはならないであろう。彼自身もいふように、人は単に考えられた神 *gedachte Got* に満足することはできないのである。われわれはさらにこの自覚体験に近付かねばならぬ。

① Pt. S. S. 202-3

② *Meister Eckhart, Die Lateinischen Werke*. Hrsg. von Josef Koch u. a. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft. 1936 ff. (以下 LW と略記) Band V, S. 40

③ *DW*. Band I, S. 150

④ *LW*. Band II, S. S. 21-2

⑤ *Ibid.*, S. S. 27-8

⑥ Heinrich Ebeling, *Meister Eckharts Mystik*, 1941.

三、神性への突破

次いでエックハルトの「突破」durchbrechen, Durchbruchの思念について見よう。「突破」においては、「誕生」の場合とは逆に、魂が被造物との関係において立つ神、すなわち三一の神を突き破って、神そのもの或は神の根柢をなす神性 *Gottheit* へ突入するはたらきが問題となる。

神の根柢と魂の根柢とは一つである。魂の根柢は魂に属せず本来神に属しているのみならず、神自身の根柢でもあるのである。魂における神のすみかは亦神における魂のすみかである。

ところで、この根柢と諸力においてはたらく魂との間には断絶がある。何故ならば魂の諸力はもともとこの根柢から発するものであるにもかかわらず、根柢自体はそのように外向化し多様化した諸力とは没交渉だからである。「魂の中に或る物がある。そこから認識も愛も流出するのであるが、そのもの自体は認識することも愛することもないのだ」と云われる。そこには只無作の沈黙と静寂とがあるの

みである。したがって、この根柢に突入するためには、魂すなわち諸力の主としての魂は自身を徹底的に空しくし、無にならなければならぬ。かくして「突破」への途は、どこまでも自己を否定し空しくする絶対的な受動の途となるのである。しかし、それが同時に、恐れを生ぜず後を振り向かず一途に不知の闇黒へ沈潜して行くという能動的な反面を有することは前章においても触れたとおりである。

神の側から見られる「誕生」と魂の側から見られる「突破」とは事態として一つであると考えられる。只、後者においてはその能動性が強く押し出され、それだけにその事態についてより多くの照明を与えるものがあることは見のがされない。

では、「突破」はいかにして生ずるのか。その生ずる有様はいかに語られるか。ドイツ語トラクタートの一つには、その消息を示唆する次のような章句が見出される。

第三に、いかにして魂が恩籠を越えて神となるかについて見よう。神が魂に与え給うたものはうつろうということはあり得ない。というのは、魂はそれによってもはや恩籠をも必要とせぬ高みに達しているからである。この高みにおいて魂は自己自身を失い神的本性の一者性の中へ駁々と流入するのである。さて人は問うかも知れぬ、失われた魂はどうなるのか、再び自身を見出すの

か、どうかと。私の所見を述べよう。各の理性的存在が自己自身を理解するまさにあの一点において魂は自己自身を見出すのである。何故ならば、魂は神的存在の一者性の中へひたすら沈潜して行っても、ついにその根柢に達することはできないからだ。だから神は魂のために、魂が再びわれをみずからの中へ旋回し、われみずからを一被造物として認識するそのような一十点 *punctum* を遣し置き給うたからである。魂がその創造者の底を尽くし *durchgründen* 得ないということは、魂にとつてまさに本質的なことだ。今私はもう魂については語ろうと思わぬ。というのは、それは神的本質の一者性の中においてその名を失ってしまったからである。だからこそそれはそこではもはや魂とは呼ばれない。その名は測りがたい存在 *ungemeinenz wesen* である。

この章句の意味するところは必ずしも平明ではない。文字面のみから見れば、魂の神性の深みへの沈潜の限界、神と被造物との間の克服しがたい距離を告白するものと解されるかも知れない。事実、福音主義の立場からエックハルトを解釈しようとする人々にはその傾向が見られる。これに対して仏教的立場に立つ人々は、ここにエックハルトの特色的な自覚を読み取る。たとえば鈴木大拙はここに出て来る一十点を禅における悟りに照応するものとし、「この点に打ちあたる時、われわれは悟りを得るのである」と述べている。④ また西谷啓治教授は同じくエックハルトの

「無から有に *von nihle ze inle* 沈み、かくして無を以て有に *mit nihle ze inle* 成る」という言葉を参照しながら、ここには同じ自覚、すなわち無のままに有となり真の現身として立つ自覚が語られている、との見方を取っている。

筆者も、この章句の用語法と文脈よりして、そこに語られているのはやはり「突破」の自覚であると見たい。すなわち、一十点における理性的・被造物的自己への旋回的還帰は二重に「突破」の意味を含んでいる。それは、まず、被造物的世界へ突破して出ることである。現実世界への自覚的還帰である。しかも、この突破によって、神性の無への魂の突入は始めてその意味を全うするのである。神性の無への突破・沈潜が先ずあってしかるのち現実世界への突出・還帰があるのではない。両者の成立は一時である。かかるものとして、エックハルトの「突破」また「誕生」の体験は、冥想・凝心への沈潜を重んずる静寂主義神秘家の神秘体験とは著しく異なり、かえって仏教的伝統の「慧」の自覚に近づくものがあることが知られるのである。

この「突破」即「誕生」から新しい存在が始まる。

精神がこの力を息子において、息子を通じて受取るとき、精神そのものがその前進の一步一步において力強くなり、それ故にまた

あらゆる徳、あらゆる完全な純粋性においてひとしく力強くなり、また、かくして愛も苦難も、また神が時間において造ったいかなるものも人を惑わすことはできず、人は或る神的な力、それに対してあらゆる事物が微弱且つ無力と化するような力の中に在るかのように、いやが上にも力づくよくその中に立ちつづけるのである。

このようにしてエックハルトにおいてはミステイクは直ちにエテイクへと流出、発展するのである。

- ① Pf. S. 282
- ② Ibid., S.S. 386-7
- ③ たとえば Wilhelm Preger や波多野精一。波多野精一「宗教哲学」(岩波新書、一九三五年刊)二六七頁参照。
- ④ D. T. Suzuki, *Mysticism Christian and Buddhist*, 1957. p. 79
- ⑤ 西谷啓治、「神と絶対無」(一九四三年刊)一三九頁参照
- ⑥ DW. I. S. 17

あとがき

以上、全く素描的にはあるが、エックハルトの「誕生」、「突破」の根柢にある自覚体験をできるだけ生地のところで見ようにとめた。しかし、エックハルトにおける真の問題は実はこれから先にあると云わねばならぬ。何故ならば神秘神学もしくは神秘思想は単に体験の記述ではありえないからである。神秘家が思想家であるかぎり、その自覚の立場から、その自覚の意味するものを、利用しうるかぎりの発想の諸源を貪婪に摂取し駆使しながら、絶えずより新しく、より深く掘り起こして行こうとする。エックハルトの創造性もつとも目ざましく発揮されたのは、まさしくこのような思弁的活動においてであるが、われわれが解積上の困難な、しかしまた興味ある数々の問題に逢着するのも亦この方面においてである。しかし、それらの問題についてはいずれ稿を改めて論ずることにしたい。